

世界聖餐日礼拝説教「神の子として生きる道」予稿

日本基督教団石神井教会 2017年10月1日

【招詞】エフェソの信徒への手紙 5章1～2節

1あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。2キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。

【旧約聖書日課】出エジプト記 20章1～17節

1神はこれらすべての言葉を告げられた。
2「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。
3あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。
4あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。5あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、6わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。
7あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかない。
8安息日を心に留め、これを聖別せよ。9六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、10七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。11六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。
12あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。
13殺してはならない。
14姦淫してはならない。
15盗んではならない。
16隣人に関して偽証してはならない。
17隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」

【福音書日課】マタイによる福音書 19章13～30節

13そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。14しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」15そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。
16さて、一人の男がイエスに近寄って来て言った。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。」17イエスは言われた。「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」18男が「どの掟ですか」と尋ねると、イエスは言われた。「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、19父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。』」20そこで、この青年は言った。「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか。」21イエスは言われた。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り

払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」²²青年はこの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

²³イエスは弟子たちに言われた。「はっきり言うておく。金持ちが天の国に入るのは難しい。²⁴重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」²⁵弟子たちはこれを聞いて非常に驚き、「それでは、だれが救われるのだろうか」と言った。²⁶イエスは彼らを見つめて、「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」と言われた。²⁷すると、ベトロがイエスに言った。「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました。では、わたしたちは何をいただけるのでしょうか。」²⁸イエスは一同に言われた。「はっきり言うておく。新しい世界になり、人の子が栄光の座に座るとき、あなたがたも、わたしに従って来たのだから、十二の座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。²⁹わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。³⁰しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

神の子らの教会、ここにあり！

10月第一日曜日、昨年に続いて今年も、「世界聖餐日」として礼拝を特別に整えさせていただきました。通常の礼拝の順序を少しばかり変更しています。日本基督教団の新しい『式文』で提示されている、超教派の教会一致を志向するエキュメニカルな礼拝順序に沿う形で、変更したのです。今日の世界を見渡したときに、より多くのキリスト教会で行われていると考えられる礼拝順序に近づけるようにしたのです。いわば、教会の外にいる人たちに対して、わたしたちの教会も全世界に広がるキリスト教会の一枝であることを、見える形で表しているのです。そうすることで、わたしたちは、一つのキリストの御体に連なる諸教会の連なりの中にあることを、この地において証ししている、と言ったらよいでしょう。

この礼拝で、わたしたちは「聖餐」を祝います。その「聖餐」のパンと杯にあずかるのは、洗礼を受けた信者だけです。洗礼によって、わたしたちは、キリストと結びつけられ、ただ天の父なる神の恵みによって生かされる「神の子」と呼ばれるようになりました。今日、わたしたちは、全世界の諸教会と共に、「ここにも神の子らの教会がある」と証ししようとしているのです。その証しの責任を引き受ける者として、洗礼を受けた者だけが聖餐のパンと杯にあずかるのです。しかし、それは、周囲の人々に、世界の人々に、見てもらうために、そうするのです。証しのために、そうするのです。その証しを通して、わたしたちの神の子としての生き方がこの世界に受け入れられ、全ての人が神の子として生きる生き方へと導かれていくことを、願っている。

「世界聖餐日」を呼びかけ始めた人たちは、まさにそのことのゆえに、何よりも「聖餐」を祝うことに意義を見出したのでしょうか。それは、ただ単に全世界のキリスト者が連帯し、一致団結しよう、というような内向きの呼びかけではなかったのです。世界中の教会が「聖餐」を祝う教会として一つであることをこの世界に示し、そのような形で世界が一つとなり平和を実現する道を世に先んじて目指す者であることを、明らかにしようとしたのです。

キリストは、神の子らに手を置いて…

福音書は、今日も、主イエスが小さな者、ことに子どもたちに目を向けられていたことを告げています。マタイ福音書を聴き続ける中で、幾度、小さな者に向けられるこのような主イエスの眼差しに気づかされてきたでしょうか。

主イエスは言われます。「**子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない**」。

そのとき、主イエスの周りには大勢の人々がいたのです。大勢の群衆が押し寄せて来ていて、だれもが少しでも主イエスに近づこうとしていたのです。弟子たちは、その人々の整理をしていたのでしょう。だれを優先すべきか、だれが主イエスの教えや癒しを早く必要としているのかを、弟子たちは判断し、主イエスとの面会の順番を決め、並ばせていたのかもしれませんが。

そのような中に、幼子連れで来て、主イエスに手を置いてもらおうと願う親たちがいました。当然、子ども自身の意志ではなかったでしょう。親が抱いて、あるいは手を引いて、半ば強引に連れて来なければ、決して主イエスのもとに自ら行こうとはしないであろう子どもたちです。もしかすると、親の意に反して、親の腕の中で泣きわめいていたかもしれません。順番を待っている間に他の子らと騒ぎだしていたかもしれません。主イエスに面会することを求めてもいない子らを、親たちが無理やり連れて来ている。そう、弟子たちの目には映ったのではないのでしょうか。「なぜ、そんな子らを連れて来たのだ。他の者たちの迷惑ではないか」と叱りつけたのです。

そのような子どもたちを「**来させなさい**」と、主イエスはおっしゃられました。もちろん、主イエスは、小さな者を慈しまれるお方です。弟子たちにも、そのようにしなさい、小さな者を受け入れなさい、彼らを軽んじたりつまづかせたりしてはいけないと、繰り返しお教えになられていました。

しかし、それだけではありません。主イエスは、「**天の国はこのような者たちのものである**」と加えられたのです。つまり、弟子たちに、「あなたがたも、この子どもたちのような者でありなさい」とおっしゃられているのです。いいえ、実のところ、弟子たちもわたしたちも、「この子どもたちのような者」として、主イエスのもとに集められてきたのではないのでしょうか。

わたしたちは皆、誰かに連れられて主イエスのもとに近づかせていただいたのです。誰かに抱かれるようにして、誰かに手を引かれるようにして、もしかすると半ば強引に、「この子に手を置いて祈ってやってください」と主イエスに願う人に抗いきれずに、主イエスを取り囲む人々の真ん中、主イエスに一番近いところへと、連れて来られたのではなかったでしょうか。

主イエスは、そのような者に**手を置いて**くださったのです。手を置いて、その者を、ご自身と結ばれた神の子としてくださったのです。そして、その神の子らの教会を、主イエスは、この世のただ中に立たせてくださっているのです。

かつて、主イエスは、弟子たちのただ中に一人の子供を呼び寄せ、立たせて、「あなたがたも**子供のようにならなければ…**」とお教えになられました（マタイ

18:1~5)。同じようにして、今度は弟子たちを「神の子」らとしてこの世界のただ中でご自身の前に呼び寄せ、立たせてくださったのです。「世界も、全ての人も、この神の子らのようになるように」との願いを、世に向けてお告げくださったのです。それが、「神の子」と呼ばれる者の教会の姿なのです。

もっと「神の子」になるように…

主イエスは、神のことを「あなたがたの天の父」（5:48 など）とおっしゃられました。弟子たち、そしてわたしたちを、「天の父」の子、つまり「神の子」とみなしてくださったのです。

それにしても、その主イエスに「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」と告げられると、少なからず不安になります。「永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか」と尋ねた青年のように、主イエスから完全になるための道筋を示されればなおさら、「とても自分にはできそうにない」と思われる者なのではないでしょうか。たとえこの青年のように貧しい人々に施すことができるような財産を持っていないとも、立派な神の子として一人前に認められるような振る舞いができるようになることなど、とても望めないのではないのでしょうか。

しかし、そのように自分のことを考えるのは、もうやめましょう。主イエスは、わたしたちのことを、財産だけでなく、知力も、気力も、体力も、集中力も、熱心さもないかもしれない「幼子」として、ご自分のもとにお呼び寄せくださったのです。「天の父の子」として、人々のただ中に立たせて、御手を置いてくださったのです。神の子として、天の父の御心を知り、行う者となるように、ご自身と結びつけてくださったのです。わたしたち人間自身にはできないことを、神が為してくださるといふ恵みの世界に生き始めるように、導いてくださったのです。

だから、わたしたちに求められているのは、「神の子」として成長して、もっと「神の子」らしくなることです。もっと「幼子」のようにならせいただくことです。ただ、天の父の胸に抱かれた者として、ただ御手に引かれた者として、神の御心の指し示すところに、手や足や心の一つ、また一つと、委ねていくことです。「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい」とお命じになられた神は、御手に抱いた「神の子」らに、御心をお告げなのです。「わたしは、あなたを殺さない。あなたを裏切らない。あなたから奪わない。あなたを偽りの言葉で欺かない。あなたとあなたの家族を敬い、尊ぶ。そう、あなたを、自分のように愛する」と。主イエスに手を置いていただいた「神の子」らは、天の父の御手の中で、そのように御心を悟らせていただくのです。

もっと「神の子」になるように、もっと天の父の懐近くに立つようと、主イエスは、わたしたちをお呼び寄せくださいました。天の父の御心が、神の子らの心になるように。神の子らの心が、天の父の御心で満たされて、天の父のように思い始めるように。神の子らが、天の父の御心のとおり生き始めるように。